

終章 棋士が詠んだイロハ歌一千首

最後に、私、中山が関係したことで恐縮だが、私が詠んだ「平成イロハ歌」一千首についてふれておきたい。

棋士が本職とする盤上以外のことで世に貢献した例は稀であるが、絶無ではなく、「碁方」から「天文方」に転じ、「貞享曆」を作った安井算哲の例がある。安井算哲ことしほかわはるみ洪川春海と言えば大変な学者で、それまで使用されていた宣明曆の不備を八百二十余年ぶりに改訂した事は、囲碁界としても誇り得る歴史的大事業だった。

イロハ歌は千年も昔の平安時代中期に作られた「今様いまよう」(当時の流行歌)であるが、その美しい五七調の調べは、明治までは日本語のアルファベットとして用いられ、永く愛誦されてきた、あの有名な、

色は匂へど 散りぬるを……

の四十七文字である。

以来一千年、多くの文人、歌人が、この日本語の表音文字、仮名の四十七音、または四十八音のすべてを一度だけ用いる歌を作ってみたものの、立派に意味の通る歌を作る事に成功した例は稀で、二百年

昔の本居宣長に一首、明治になってから万朝報が公募した時の優勝作「鳥啼き歌」の二例がますますの作と申せようか。

それを、国文学者でもない一棋士が千首も詠んだのは国文学史上の一大事件だそうであるが、その歌のほとんどが意図的に囲碁を詠み込んだところに、囲碁界としては意義があるので、囲碁ファンの為にも後世に残す意味もあるかと思つたのである。読者各位、御諒承のほどを……。

(い)

いろは歌詠み 名乗あげ
圍碁に智慧追ひ 夢を得ぬ
照る月 笑へ 星 眠れ
吹く風止まず 怎麼生と

(は)

花摘む野末 日も落ちて
空 夕焼けし 色冴えぬ
鳥聴く民家 梅數多
吾へほにせよ 圍碁を練る

(ろ)

廬に春の風 吹き初めて
老松八千代 咲くすみれ
呆け得ぬ所以 圍碁を練り
友あひ馴染む わらべ唄

(に)

二子の頭 見ずはねて
いざ 唸らせよ 我が劍
圍碁論じ今日 智慧を得ぬ
夢 怖れむや へほひとり

(ほ)

亡びし平家 末つ世も
散るあだ櫻 夢を追ふ
波うねり始む 風は來ぬ
我 苦屋にて 圍碁の宴

(へ)

平家亡びし 物語
書讀む窓に 散る櫻
雨ゆゑ吾は せんす得て
寝ぬ圍碁を打つ 翁ぞや

(と)

遠き萬里の 旅路ゆゑ
圍碁得て寝ざる 夜明前
不足もならず お主 吾
烏鷺愛つ身をや いかにせむ

(ち)

散る夜櫻に 寝ず歩み
花を追ふとて 袖失せぬ
宴やめし爐邊 吾も酔ひ
月 傾けり 圍碁の庵

(り)

龍膽の花 咲く村邊
出でし若き日 喚ぶを得ず
圍碁見とれ練る 袖瘦せぬ
實に天地も おぼろゆゑ

(ぬ)

主と終日 圍碁の宴
酒なき庵に 智慧はあり
見よ空高く 舞へる烏鷺
夢を追ふ吾 徹夜せむ

(る)

流浪の旅は 面白や
時を忘れつ 園碁幾夜
朝夕に智慧 練りて南無
世尊へ見え めげぬ顔

(を)

尾根聳えつる 深山奥
庵に情と 夢ありき
主夜もすがら 打ちて酔ふ
我は論ぜむ 園碁の妙

(わ)

我も海より さすらひぬ
艚を任せけむ 沖つ潮
笛の音誰そや 園碁口傳
花散るゆゑに 雨いとへ

(か)

神造りぬる 園碁樂し
世に夢を得て 幸多き
鳥鷺争ふも 懸念せず
日は笑む大和 平和なれ

(よ)

夜櫻笑めり 春の園碁
寝ぬ星と吾 夏ぞ打て
老いを變へたや 秋もみぢ
負けず論ぜむ 冬冷えに

(た)

旅空は笑み 美しや
良き園碁の譜を 我 悟り
大いなる夢 胸に得ぬ
敢へて論ぜず 勝ち負けも

(れ)

歴史は古りて 圍碁の道
今に傳へぬ 故あらむ
金多く得ず 難を避け
和せる諸人 嘘やめよ

(そ)

空に星かけ 冴えわたる
いや増す想ひ 啼く千鳥
君の胸打つ 夢終へぬ
あはれ論ぜよ 圍碁で酔ふ

(つ)

露の世に吾 圍碁を得ぬ
勵めどもまだ 白あちら
へぼなる身酔ひ 嘯きて
愚妻寝やせず お冠

(ね)

音色凜たる うぐひすや
あけほの寒し 夢終へぬ
強き圍碁見て 思ふかな
我らには智慧 得ませとぞ

(な)

長き人生 晴れ曇り
夜にあさ智慧 大笑ひ
笛の音澄みて 爐邊を抜け
圍碁打つ 苦屋 誰そ夢む

(ら)

樂をして勝つ 術ありや
夢みる度に 智慧は萎え
嘯きもせむ 我老いぬ
寢呆けとロマン 小夜の圍碁

(む)

難しの園碁 我は得ぬ
烏鷺練る習慣 幾歳ぞ
夕餉もやめて 本を讀み
巷に酔へり 朝起きず

(う)

美しき夢 今日見せむ
大空翔びて 夜も寝ず
山の彼方へ 我は去ぬ
遠路幸あり 園碁を得に

(ろ)

田舎に栖みて 面白や
酔ひたる世間 嘲笑へ
祭の笛を 聞く庵は
碁打ち眠れぬ 夢世とぞ

(の)

野邊春淺き 薬屋根よ
枝に一輪 梅ゆかし
重揃ひぬ 今日も笑む
僕と園碁なせ お出を待つ

(お)

沖つ白浪 打ち寄せぬ
漁火はるか 帆をあげて
夢湧く園碁の 友や誰そ
閻魔眠れず 爐邊に酔ふ

(く)

雲白き尾根 吾が庵
雨降る故に 酒竝べ
柚群れ寄せぬ 園碁の宴
おやちは隅で 歌ひとつ

(や)

山の彼方に 空遠く
碁を打つ家で 世間見ず
夢追ふよ 我 浅き智慧
ゐろり火もえぬ 春眠し

(ま)

松風さわぐ 村なれば
ゐろり火もえて 寝ず打ちぬ
石音妙ぞ 聲を聴け
凡夫夢みる あの世にや

(け)

今日より圍碁に 我生きむ
夢追ひ寝得ず あな樂し
へほで負くるを 勝ちとやら
怎麼生説破 烏鷺笑みぬ

(ふ)

ふるさと今も 水清く
明日歸りなむ 夢うれし
誰そ薬屋根を 背に負ひて
廬は呆けぬ智慧 圍碁の宴

(こ)

碁は指運よ 面白や
吾智慧練りて 見え初めぬ
秋更け庵に 風寒く
井戸の釣瓶を また鳴らす

(え)

縁有りて吾 烏鷺招く
素知らぬ風と 酔ふ夢や
髭も乙なる 君に寄す
才智を恃む 圍碁はへほ

(て)

照れば廣野へ 若菜摘み
雨に智慧ねり 老ゆとせむ
園基を得たる夜 酒うまく
随喜も知らぬ 凡夫ぞや

(あ)

開け得ぬ園基の 門を背に
無駄骨ばかり 吾口惜し
老い待つ君よ 酔ひて翔べ
夢路さすらふ 烏驚なるぞ

(さ)

櫻ほろ散る 園基の宴
我も忙し 責め負はで
今日ひと眠り 明日を待つ
惱に耐へぬ 浮世ゆゑ

(き)

君よ知らずや 我がサロン
園基を得ぬ人 哀れなる
夢失せ不貞寝 またも酔へ
おつむに呆けの 入口ぞ

(ゆ)

夢を得し吾 奥山に
智慧練り歌ひ 小夜更けぬ
庵あむ通路 園基の友
春風盡きず 美空撫で

(め)

冥府の園基は 面白や
下手さ見ゆれど 素敵なむ
智慧練る閻魔 笑ひけり
余に嘘をつく 阿呆ぬかせ

(み)

未來みらいに遊あそべ 圍碁ゐごの宴えん
昔むかしを懷おもひ 古ふるき歌うた
我われ智慧ちゐねりて 夢ゆめやまず
咲さく花はなよろづ 解げせぬほど

(し)

白菊しらぎく咲さける 我わが庵いはへ
友とも集あつまりぬ 圍碁ゐごの宴えん
惱なやみにふれず 智ち慧ゐ追おひて
夢ゆめを果はたせよ 烏う鶯ろ寢ね始はむ

(え)

遠路えんろはるけし 天地あめつちを
さすらふ旅たびよ 圍碁ゐごに老おゆ
いま八十やそへほ手て 消きえ失うせぬ
吾われ 無む我がとなり 峯みねの雲くも

(ひ)

終日ひねし庵いはに 圍碁ゐごを得えて
月つき笑わらむ空そらへ 夜風よかぜ吹ふく
負まけぬ思案しあんと 夢ゆめ見みたる
吾われは草廬さうろうの おやぢなり

(も)

諸手もろてあげませ 圍碁ゐご讚歌さんか
書讀よみよみむ部屋へやに 螢ほたるの燈ひ
智ち慧ゐねり暮くす 夢ゆめを得えぬ
我われは石打いしうつ 翁おきなとぞ

(せ)

世界せかいに圍碁ゐごを 弘ひろめずや
我われは智ち慧ゐねる 男兒だんじなり
大空おほぞらの上うへ 月つき冴さえぬ
書讀よみよみむ窓まども 明あけて行ゆく

(す) 水天^{すいてん}けむる 海原^{うなばら}を

見^みおろし得^えたり 園^ゆ碁^ごの里^{さと}

熱^{あつ}き血^ちに惚^ほれ 湧^わく夢^{ゆめ}が

醉^まひ舞^まふ部^べ屋^やぞ 寝^ねもせぬよ

とりあえず以上四十七首、江戸時代以前の古文法を厳守した歌をごらんに入れた。古文法については、国文学者の点検を仰ぎ、いささかでも疑わしい歌は除外したので、まあ後世の観賞にもたえるかと思う。園碁は日本古来の文化であるし、古来の大和ことば(日本語)はわが民族最大の文化遺産であるから、ともども大切にしなければならぬと思うのである。

拙文御愛読、まことに有り難うございました。最後に、小生のライフワークとなった新しいは歌一首を吟じてお分かれとしよう。

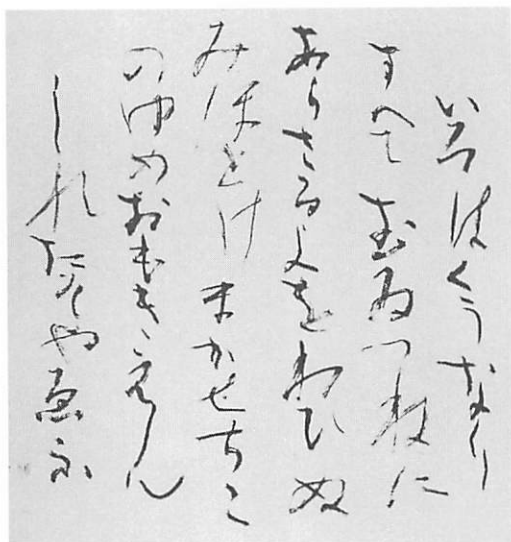
無^む爲^ゐの浅^あ智^ち慧^ゑ 凡^{ぼん}夫^ぶ老^らゆ

空^{そら}音^ね幕^{まく}終^をへ 我^{われ}消^きえぬ

せめても名^な残^{ごり} 詠^よみにける

いろは清^{すが}しや 歌^{うた}ひとつ

佐々木萬月氏(書家)が展覧会に出品した平成いろは歌(中山典之詠)



色は空なり

すべて無爲 常に

非ざる 世を侘びぬ

み佛まかせ 稚兒

の夢 重き縁

知れ 誰そや酔ふ